座談会

1920年代のアメリカ

出席者（発言順）

大学長（英米文学）	上野直蔵	文学部教授（米文学）	木村俊夫
経済学部長・アメリカ研究所実行委員長（農業経済学）	小松幸雄	文学部講師（米文学）	松山信直
経済学部教授（経済学）	田口芳弘	文学部講師（アメリカ史）	大下尚一
文学部教授（アメリカ史）	オーティス・ケーリ	文学部講師（米文学）	岩山太次郎
経済学部教授（労働問題）	松井七郎		
商学部教授（貿易論）	原猛夫	司会：経済学部助教授	榊原胖夫

同志社大学アメリカ研究所と1920年代

榊原　お忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。アメリカ研究所も発足いたしましてから四年目になりまして，本もどうにか揃ってまいりましたし，広い新しい部屋に移りましたし，このへんで一つ同志社の全学的な立場から研究体制を整えなければならない段階になってきました。そういうところから研究雑誌を発行しようという案が出てまいりまして，われわれがどういうテーマで研究を始めようとしているのかを内外に発表しようという趣旨で，この座談会が催されたかと思います。

まず最初に，本日のテーマであります「1920年代」ということからすこし離れますけれども，同志社大学のアメリカ研究所の設立されました経過と意義，あるいはいろいろな学問的なプログラムが東京方面に集中している傾向に対して，特に関西でアメリカ研究を積極的に行おうとする同志社大学の体制といったところから，上野先生にまずお話をうかがいたいと存じます。

上野　では，アメリカ研究所の前身になりますことから始めさせていただきたいと思います。

1951年にロックフェラー財団の援助によりまして，アメリカ研究夏期セミナーをスタンフオード大学と組んで東京大学で開催いたしました。東京のアメリカ研究夏期セミナーは，二週間を地方でやるという計画になっておりまして，それが二年目に京都にまわってまいりました。その際に，私共は，この種のセミナーは単に東京で開かれるのみならず関西の方でも，特に京都において，東京から独立した形でアメリカ研究をやりたいということを，当時の政治学の部門でみえておりまして現在イリノイ大学の副学長をやっていらっしゃいます，Dangerfield 博士にお計り申し上げました。そうしたところ，それは大変よい計画であるということでありまして，私達の方ならびにイリノイ大学の方からロックフェラー財団に交渉いたしまして，12年前に京都アメリカ研究セミナーなるものができたわけです。すべてこれの財源の裏付けは，ロックフェラー財団がしてくれることになりまして，京都大学と同志社大学とが提携をいたしまして，アメリカ研究を始めたのでございます。東京の場合と違うところは，東京では最初申しましたように夏期のセミナーだけであるのに対し，京都の場合は，一年を通じた計画にしたいというように考えまして，約半年間一人のアメリカの学者に来ていただき，それからまた，後の半年を別の方に来ていただく。このようにいたしまして，前期の先生と後期の先生とが重り合うその夏に，京都の夏期セミナーを開いてきたわけです。

東京と京都のアメリカセミナーの間には，京都が独立いたしましてからあまり連絡はありませんでした。東京の方は，その五年間で夏のプログラムを止めたわけですが，京都の方は，ずっとそれからも続けてまいりまして，東京が止めた後は全国的なアメリカ研究夏期セミナーというような形になって，北海道からも，九州からも，参加者が集まられまして，毎年四部門，

あるいは五部門というように開いてまいったわけです。会場といたしましては，京都大学と同志社大学とが毎年交互にこの夏期セミナーを担当しております。

一方におきまして，半年来ていただいております先生は京都大学で講義をされ，また同時に同志社大学でも講義をして下さる，というようにして続けてまいりました。また一方，ロックフェラー財団の方からの援助で，向こうから先生が来て下さるのみならず，私達の方からも，つまり京都大学ならびに同志社大学の方からもアメリカの方へ先生方がビジティング・スカラーとして渡米して，講義をしていただき，あるいは研究をしていただくというような期間がおよそ五年間続きました。その五年の期間が切れたので，今度はやり方を変え，組織を変えて京都大学と同志社大学とが別々にロックフェラー財団からアメリカ研究のために援助を受けることになりまして，それまでに集めましたアメリカ研究所の図書は，京都大学に移譲して，同志社大学の方へは図書費と，私共の大学の先生方がアメリカに留学される費用とのこの両者を合せまして，三ケ年間の援助を得たわけです。同志社大学のアメリカ研究所は，このような経過をへて誕生いたしまして，図書を購入し，研究体制を整える一方，多くの先生方に留学していただいたのであります。留学されました方は，他にもいろいろとスカラーシップを得られましたので，予定しておりました数より遙かに沢山の方がこのロックフェラー財団の援助にもとづく同志社アメリカ研究所の推薦で留学されることになりました。そして図書の方も，いま司会者もおっしゃったようにぼつぼつと集まってまいりました。けれども，何分にも部門が五つ，あるいは六つに分かれておりまして，これとおぼしき図書を選択しますのに，相当の期間がかかりましたために，図書に関しては三ケ年の期間をさらに二年間延長させていただいたわけです。今日，一通りみせていただいたところでは，弘風館四階にあった頃と比べまして，図書の充実には格段の相異があると思います。これはみな，それぞれ委員の皆様のご努力に負うところが多いと思います。また，その利用の方も進んでいるようで秘かに喜んでいる次第です。

以上，司会者のおっしゃいましたことにお答えできたかどうか存じませんけれども，同志社大学アメリカ研究所が誕生するまでのあらましの歴史を申上げました。

榊原　どうもありがとうございました。上野先生はアメリカ研究所の初代の委員長であられましたが，その後上野先生が学長になられましたので，現在は経済学部長の小松教授に委員長の重責をになっていただいております。小松先生から同志社の中でのアメリカ研究の体制を打ち立てていくうえのご抱負を聞かせていただきたいと存じます。

小松　私は最初から，こういう研究所の実行委員長というような柄ではないと思って固く辞退させていただいていたわけでありますが，まあ，いわば事務長というような形でならと思って引き受けさせていただいている次第であります。したがって，重要な企画とか，あるいは構想といったものは，実行委員の諸先生のご意見にしたがっていきたいと存じます。ただ先程，上野先生もおっしゃいましたように，既に相当数の本がここに集められておりますので，これをむざむざと書庫の中に眠らせるのは本当にもったいないことであり，これをできるだけ有効に使っていただけるようにしたいと思っております。そのためには，これから本格的に研究体制を作り上げてゆく必要があり，またその段階にもきていると思います。アメリカ研究にご関心のある本学の先生方には，なるだけ多くの方々に関係していただいて，この研究所を同志社の一つの大きな柱にしてゆきたいということを秘かに考えている次第でございます。もっとも，研究体制の整備という点については，まだまだ十分でないと思いますので，特に今日お集まりいただいた先生方に，その柱になっていただいて，この研究所を立派なものに育てていただき，日本におけるアメリカ研究にとって一つの有意義な存在にしたいと念じておるわけです。

榊原　どうもありがとうございました。研究所の中心テーマは，両大戦間の研究ということになっておるのでございますが，最初にそういう案をサジェストされましたのが田口先生であったようにうけたまわっております。田口先生に，サジェストされました理由というようなところを，一言述べていただきたいと思います。

田口　サジェストしたという僭越なことではなく，好いかげんな思いつきで申しているうちに，他の先生方が具体的におまとめ下さったのが実情です。

アメリカ研究をする場合，一つの方法としては，アメリカの一定の地域，例えばニュー・イングランド，中西部，南部，西海岸といったある特定の地域を選んで，あらゆる領域の専門家が，それぞれの専門の立場からその地域についての綜合的な共同研究を行なう方法で，そうした研究がかなり行なわれているようで

す。一方，そういう特定の空間ではなく，歴史的にある特定の時期を選んでいろいろの分野の人々が共同してあらゆる側面から研究するというのも，日本でアメリカを研究する場合の一方法ではないかという気がいたしました。それでは，どの時代を選ぶかということですが，その場合に，第一次大戦のあと，1920年代，あるいは30年代を含めた両大戦間という時期が共同研究の対象として適当ではないかと思われます。1920年代というと，そう遠くはなく，“only yesterday”というわけで（今日では，もう，“the day before yesterday”ぐらいかもしれませんが），身近な話としては，野球ファンになじみの深いベーブ・ルースの全盛時代，アンタッチャブルの活躍した時期，という風に感覚的にも比較的現代とつながりが深い時期です。また，アメリカは第一次大戦を契機として，いろんな意味で本当にアメリカ的な特徴が強くなって，文字通りのユナイテッド・ステイツになったと思います。

一方，第一次大戦より古い時代になりますと，歴史のかたがたは興味深いでしょうが，資料の不足という問題もあって，社会・経済の面から実証的に研究することが困難になってまいります。そこで，比較的現代とのつながりも深く，時代の特異性もあり，資料もある程度整っていて，共同研究のやり易い20年代が共通のテーマとして面白いのではないかと思ったわけです。そして，できれば20年代，30年代，40年代，50年代，そして60年代と順次に年代を追って研究してゆくと，つながりがついていきそうだといった思いつきを申しあげただけです。

20年代の背景

マス化と標準化

榊原　それではまず，ケーリ先生から20年代の背景について概観していただきたいと思います。

ケーリ　20年代は，アメリカにとって第一次大戦をあとにして，より大きい発展への準備期間とみることができます。このような前提から，20年代の背景になるような問題をごく簡単に並べてみましょう。第一に，アメリカの国民が知らないうちに世界の経済の中心が，第一次大戦を境にしてロンドンからニュー・ヨークに移ったということです。第二に，第一次大戦をもって，マスプロのアイディアがアメリカ社会に本格的に根をおろしはじめたということです。このマス化の影響が，生活一般に及んできます。この点から，社会の standardization, urbanization, mobility ということがとりあげられると思います。第三は，このようなアメリカ社会の成長と関連して，国内の nationalism と国際的な isolationism が論じられると思います。第四は，政治面では，normalcy ということで登場する Harding, Last Puritan と呼ばれる Coolidge, そして Hoover という三人の大統領の時代ですが，この三人によって代表される時代の政治とビッグ・ビジネスとの関係が取り上げられるでしょう。五番目は，国民一般の風潮として，intolerance と conformity ということに関して，進化論をめぐる Scopes 裁判，禁酒法，移民法をとりあげてもよい。また文化面では，宗教的に最もリベラルな時代，美術界のアブストラクトへの傾斜といった現象が指摘できます。Lost Generation などの面白い問題がたくさんありますので，今日はいろいろ教えてほしいと期待しています。

その他まだ多くの事柄があると思いますが，この時代の特徴は，音楽の Jazz Age という言葉が示すように，ジャズの本来の語源的意味の speed up すなわち，「ものすごく早める」ということがこの時代のマス化の重大な威力をよく表わしていると思います。科学と機械の発達によって，広範囲に一つの文化がすみずみまで行きわったていく mass culture の時代の到来が20年代で，この時代のアメリカ人は，マス化の誕生のために相当な犠牲を国内・国外に払ったわけです。1929年の大恐慌を単に経済的に取らえるだけでなく，社会的にはこうした点からも考えてよいと思います。

榊原　ケーリ先生が20年代に関していくつかの主要な問題を提出して下さいましたので，これに沿って検討していったらと思いますが，まずケーリ先生の20年代観の中心になっているように思われますマスのアイディアが，20年代にアメリカ社会に本格的な根をおろしはじめたという点から，20年代にアメリカに居られた松井先生と原先生から，実際にご覧になりましたアメリカのマス化ということについてご意見をうかがいたく存じます。

松井　そうですね，マス化という特殊な問題に対する直接的なお答えにならないかも知れませんが，マス化の問題と多少つながってくる意味で，20年代における経済の問題点を若干指摘したいと思います。

20年代は，アメリカ経済の好況時代で，22年から29年まで，なだらかな繁栄の経済が続いたわけですが，その繁栄経済の経済的な原因を調べてみますと，この時代はある意味では技術革新の時代であったと思います。経済の発展を段階からみて，ちょうど現在の日本が経験しているような技術革新をアメリカでは20年代にすでに経験していたのではないかと思います。そのため，巨大な産業の設備投資と並んで個人の住宅に対しても投資が盛んで，これが建設産業を発展させ，経済繁栄の大きな原因になったと考えられています。さきほどのマス化という問題は，技術革新の結果，コンベアによる大量生産方式が確立されたために起ってきた問題だと思います。それから，もう一つのアメリカ経済の繁栄を維持した原因は，国際貸借関係がアメリカに有利であったことです。22年から29年までの間に，国際貿易の輸出超過が80億ドルに達したのですが，それだけアメリカで生産されたものが海外へ輸出されたわけです。それから，第3の繁栄の原因は，いわゆる消費者信用制度（月賦販売制度）がこの20年代に非常に発展をとげたことがあげられます。この制度によって，自動車・電気冷蔵庫・電気洗濯機のような耐久消費財が信用でもって購入することができたわけで，20年代のアメリカ経済の繁栄を支えた重要な原因ではなかったかと思います。

それから，国民所得の分配と景気との関係ですが，この点についてはいろいろ議論があるようですが，この時期においてはやはり，利潤・利子所得の方が賃金所得よりも増加率が高く，その利潤・利子所得のかなりの部分が企業への再投資ないしは株式市場への投資となり，それが累積して29年のクラッシュをひきおこした一つの大きなきっかけとなったといわれております。さきほどのマス化という問題ですが，フォードのコンベア・システム，すなわち，流れ作業による大量生産方式が一番発達したのはこの時代で，そういう点から Hoover などが standardization, specialization, simplification ということを盛んに奨励して，大量生産によって物を安くする。安くすると，消費が伸びてますます大量生産を刺激し，その結果コストがさらに引き下げられるという循環が，20年代にはかなり急速に発展していったと思います。このような理由から，経済の面ではいわゆる「マス」というような考え方が非常に発達して，経済以外の面にも非常に大きな影響を与えたのではないかと思っております。

原　ケーリ先生が最初に指摘された中にも，1920年代のアメリカでの standardization ということがありますので，ただいまの松井先生の1920年代の経済の特徴についてのお話の続きとして，標準化，合理化を基調とした20年代およびそれ以後のアメリカの貿易方面における著しい特質を申し上げたいと思います。

アメリカが国際貿易の面で積極的な活動と躍進をみせ始めたのは，第一次世界大戦後でありまして，貿易立国の英国を凌駕する態勢を整えたのは，実に同年代間であります。いまやアメリカの国際取引は汎米主義の対カナダ，対中南米の比較的狭い地域との取引ではなく，対欧州地域への販路拡大でありました。しかし，当時アメリカの産業標準化運動の基本理念は，合理化を通して各企業者の利潤増大のための最も有効な手段としての計画にありましたから，貿易業態においても，英国やその他の欧州資本主義国にみられる多数の中間者の介在する流通構造のままでは，利潤の幅も狭いし，また過当競争も極端にはしるので，中間者の排除，つまり流通構造の改革＝合理化を通して貿易の拡大発展の計画がなされたので，メーカーが自己の企業経営中に，貿易部門を併置して直接輸出取引に従事する形態を採用しました。この製造業者・生産者が直接に貿易企業を行なう業態は，わが国では，ようやく第二次大戦後になって大巾に行なわれるようになってきて，中小貿易専門の商社には脅威を与えておりますが，アメリカの貿易発展の背景としてこの標準化・合理化・単一化運動の展開は20年代の特徴として見逃すことはできないと私は考えております。

アメリカの COMING OF AGE

上野　松井先生と原先生から20年代にアメリカにご滞在になったご経験並びにご滞在中のご勉強を通してのお話をうかがったわけですが，20年代の諸問題に入る前に，アメリカ研究所の研究テーマである20年代，30年代を大ずかみにする必要があると思います。すなわち第一次世界大戦以前と，第一次大戦から第二次大戦までの間と，第二次大戦後，この三つの時期のアメリカ思想・文化とか，産業あるいは外交などをまず大ずかみにしてほしいものです。そうしないとあまり細い点に入ってしまって，かえって分りにくくなるのではないでしょうか。

木村　私，その事に関して考えてほしいのは，20年代，30年代というは非常に整理しやすい分類ではあるけれども，われわれが文化を対象にする場合には，単

にクロノロジカルに切ってゆくというだけでは非常に機械的であるという事です。文学をやっている場合，特に詩などをやっている場合には，20年代，30年代とだけいってみたところで，それはまだ非常に機械的な区分です。それで20年代，30年代という区分自体がわれわれの研究に都合がいいのか悪いのかということがまず問題となると思います。芝居の場合では大体これでよいという答えは出てくるのではありますが。そういうことも一緒にみていく必要はないでしょうか。

榊原　おっしゃるとおりで，地域研究にはお互いの専門に小さく入っていくより，つねに全体ということを念頭においていく必要があると思います。その三世代を通じるところのアメリカ史におけるところの連続性と非連続性というふうなところを一つ，ケーリ先生からお願いします。

ケーリ　ごく簡単に私の考えを申します。20年代は割合それだけでまとまる時代じゃないかという気がしています。というのは，第一次大戦後，1919年に平和条約を結んでしまい，ちょうど20年に選挙があって，29年の大恐慌があるわけです。歴史的にというか，時代的にみて，20年代というちょうど10年間はまとまったものがあるという気がします。もちろん，上野先生がいわれたように，第一次大戦前と，両大戦間と，それから第二次大戦後ということも当然考えていい分け方にはちがいありません。戦争は全文化というか，国全体がひきずりまわされるものですから，今の三つの分け方もできます。これは，アメリカ史における大戦の役割という問題にして考えると大変面白いのですが，それは，大戦前との戦争後のアメリカ社会の変化をみていくうちにはっきりしてくると思います。

さて，大づかみにしてみると，私が指摘したいのは，第一次大戦を経て，アメリカ社会はマスプロを完全にレールに乗せたということから歴史を見ることが出来ると思います。自動車は20世紀に入ってからぼつぼつと顔を出してきますけれども，大衆にゆきわたるのは第一次大戦後のことで，それまでは，まあ一つのハイカラなもの，あるいはおもちゃであったといえましょう。大戦前は道路も町以外では重要でなく，やはり鉄道に頼らなければならなかった。そのようなことが，交通だけじゃなしに，あらゆる方面にわたっていえるわけです。それぞれの方面でみられる変化をみていったらどうでしょうか。

田口　経済の方では20年代は「永遠の繁栄」の時代，30年代は「永遠の不況」の時代と信じられていた時代です。

原　第一次大戦までは，端的にいって，アメリカはいわゆるモンロー主義政策にたてこもっていたとみてよい。もちろん，モンロー主義の伝統は第一次大戦後も続いてはいるが，しかしこの大戦後のアメリカは，賠償の義務を履行させる必要もあって，対欧州政策に転換している。例えば，国際金融の立場でみても，金融市場の中心がロンドンからニューヨークに移動してきたのも事実で，アメリカはこの大戦を契機として，アメリカ州のアメリカから欧州・アメリカを打って一丸としたアメリカに成長発展したとみることが出来るのではないでしょうか。当時の若いアメリカ人学生間に，自分たちはもはやアメリカ州だけのアメリカ人ではなくて，欧州と米州の二州間のアメリカ人であるという優越感と自負心が強く働いていたことは確かです。私は当時アメリカのある大学で，外国貿易論や外国為替論の授業を受けていて，学生たちがいかにアメリカの欧州政策に強い関心を持っていたか，また欧州諸国の経済的力に対抗して，アメリカのより支配的な経済力に自負と誇りを抱いていたかを実感させられました。

松井　アメリカは第一次大戦までは保護貿易を採用し，また債務国であり，経済的にどんどん発展しなければならないという状態ではなかったかと思います。ところが，大戦中，ヨーロッパに対して債務を返債したばかりではなく，戦費をまかなうため，ヨーロッパ諸国に貸付けをしたので，第一次大戦後は国際的に一躍，債務国から債権国に変わってしまったわけです。

原　自給自足の汎米主義からアメリカ経済の支払力は，第一次大戦後に1929年以後の未曽有の恐慌に耐えながら，欧州地域へ拡大され，さらに第二次大戦後は自由主義陣営の国際的世界地域へと三段階の発展をしてきたとみてよいのではないでしょうか。

田口　国内的には，19世紀の終りから1900年代，1910年代というのは，第一次産業から第二次産業にきり変わって製造業が急に大きくなっていった時代で，一応ある高いレベルに到達して，第一次大戦に突入していったわけです。だからその間の経済の成長率が非常に高いわけです。

上野　第一次大戦前の時期に経済発展のテンポが速かったという，その原因は何ですか。

田口　いま手もとに具体的な資料を持ちあわせませんが，鉄鋼業と鉄道の発展が中心だと思います。それに鉄道に関連する産業が非常に発達して，第一次大戦前

に産業の基盤が十分にできあがっていたわけですね。

松井　自動車産業がぼつぼつ。

田口　自動車産業はまだまださほど大きなわけはなかったと思います。

木村　分野によって，いろいろなことがいえると思いますが，文学の場合，はっきりいえることは，アメリカ人が自分の文化に自信を持たなかったということです。芝居の世界についていえば，これは特に保守的なものでありました。なぜかといえば，劇場というものはそう急に変えられるものでなく，theater going public というものも，そう一挙には変わらない。だから詩や小説なんかよりも一歩おくれがちである。この芝居の場合など，第一次大戦前には，アメリカ演劇の自覚というものがあまりない。実は英国のコロニー，英文学の一つのブランチである。いわゆるヴィクトリアニズムが常識になっていて，アメリカ演劇はなるほど地域的にはアメリカ演劇ではあるけれども，内容としては，イギリス演劇及至は漠然としたヨーロッパ演劇のやき直しという風なものでしかなかった。ところがそれが第一次大戦後，経済的な自信の裏付けなどがあってはじめて，アメリカが一人前であるという自覚を持ちだした。O'Neill がノーベル賞をもらっているのは1936年です。その時に，O'Neill は自分がこの賞をもらったのは，アメリカ演劇が独立した証拠だといった。だから，36年にノーベル賞をもらったという事でアメリカが演劇の世界で独立した事が確認された，ということになるが，事実としては20代にアメリカ演劇は独立したということができる。第一次大戦前は，アメリカ演劇は実は十分な意味でアメリカ演劇ではなかった。それに今の鉄道のこととからんでいますが，第一次大戦前はブロードウェイというものはまだ演劇のセンターではなかった。巡業団がいろいろあって，その数は非常に多く，それが鉄道を利用していた。ところが第一次大戦が終る，汽車賃は高くなる，映画が出現するというわけで，地方に映画が普及してゆくと，芝居の巡業団は昔ほどの意味を持たなくなってくる。巡業制度の衰えて来ると同時に，ブロードウェイにはっきり演劇の中心が確立してしまった。ここで補足的にいっておかねばならないことは，アメリカ演劇を語る場合，今でも諸地方でのいわゆるトリビュタリー・シアターの存在は重要なものであるということです。とにかくブロードウェイという演劇の中心地確立が20年代，第一次大戦以後と以前を区別する大きな事実と思います。

よくわれわれがアメリカ史の本を読んでおりますと，例えば Siegfried の本でも「アメリカ成年期に達す」という言葉が使われている。これは外国人が単に外面的なアメリカの繁栄を観察していった言葉なのではなく，アメリカで育った人々が，わしらはもう大人だという意気ごみの自覚を持ちだしたことを反映している。そのへんのところが非常に興味があります。アメリカ人が自分の文化に自身を持つか，持たないか，これが文学をやっているものには非常に大切なことになる。

松山　今の木村先生のお話を裏付けするように，1915年に Van Wyck Brooks が *America's Coming of Age* という題のアメリカ文学論を書いたわけですね。やはりそれまでのアメリカ文学といいますと，どうしてもヨーロッパの基準で計って，まずアメリカで売れるよりは，ヨーロッパで売れたらアメリカで売れるだろうという目安をもとに出版していた。ところが，それがだんだんとアメリカという舞台でもって売り出して行こうという気構えになった。しかしながら一方，そのアメリカの社会は，やはり一種のヴィクトリアニズムみたいなものがあって，1900年の Dreiser の *Sister Carrie* でさえ発禁になった。そういうヴィクトリアニズム，それが第一次大戦で，がらっとひっくり返った。と同時に，アメリカ文学が別にヨーロッパに気がねすることなく出版されるようになった。

榊原　つまり，第一次大戦前のアメリカというのは，本当のアメリカ人というのはおらず，ヨーロッパ移民の何々君の子供であるとか，あるいは直接東欧の一世であるとか，そういう連中の寄り集まりであったわけですね。これが20年代になんとか一時まとまりを示してくる。その証拠として現われてくるのが移民法で，もうこれ以上移民はいらないんだということです。われわれはこの中で，実はアメリカ人というものができあがったんだと，少し大げさですがいってよいと思います。

もう一つは経済的な面です。それまで，それぞれの分業体制ができていた。というのは，南部では例えば綿花を造ると，東部では工業をやる，西部では農業をやる，という風な調子の分業体制の経済が，こんどは一つの大きなもの，ユナイテッド・ステーツ・オブ・アメリカを一単位として動けるようになる。そういうところからみると，経済の発展にともなって，アメリカ人というのができあがってくる。今日，われわれがアメリカ人の特徴だと思っているようないろいろな性

格がこの時期に形成されていったんではないかという風に思います。その大きな特徴を，ケーリ先生がマスという言葉で表現されたのではないでしょうか。

ケーリ　ええ，第一次大戦までのころでは，たしかに，今いわれたとおりだと思います。さきほどの劇の話に関連して，もう一度文学の話になるのですが，この前死んだ Robert Frost が面白い例だと思うんです。アメリカでああした古い堅さで書こうとする彼が，結局アメリカでは売れず，英国に行って，英国で始めて自分の処女出版が出るわけなんですね。それが1915年だったと私は記憶しているわけですが，これが，ちようど第一次大戦前なんですね。こうして英国で認められると，こんどはアメリカで，ああそんなのがあったかということで，彼が帰えってくると人々の関心をひくということでしょうか。

木村　それまでは，一般的に立ちおくれているか，何か立ちおくれの意識をもっているものは，自分の国の文化的価値を正当に評価する自信を持たない。だからよその国で何んとかいわれると，俺も偉かったんだということになる。わが国でも，谷崎潤一郎にノーベル賞がくるかも知れないというううわさを立てるのにも似たような点がないでもない。

上野　ちょうど，日本の桂離宮みたいですね

松井　経済的にも第一次大戦前，アメリカはインフェリオリティ・コンプレックスをもっておった。それで保護貿易をしなければ，ヨーロッパの商品がどんどん入ってくる。そこで，高い保護関税で保護していたわけです。そういう点で文学の独立が認められなかったということと対応するんじゃないかと思うんですがね。ところが第一次大戦を契機として債務国から債権国になって，事情が一変してしまうことになったんじゃないかと思いますね。　（木村退席）

20年代の諸相

繁栄の経済と社会

榊原　20年代とその前の時代が，相当浮彫りされたんではないかと思います。それで，いよいよ20年代に入っていきたいと思います。それで，マスという特徴をケーリ先生があげておられますし，さきほど，マスプロダクションとコンサンプションのパイプが太くなったという話がありましたが，アメリカ自身の消費生活といいますか，衣食住も非常に変ってくると思うのですが。そういう点でどうですか。田口先生。

田口　経済の面では，20年代は「繁栄の時代」という名で呼ばれる特異な時代であると同時に，ある意味ではその前の時代からの連続であって，10年代にすでにあったものが20年代に非常に大きく成長してきたんだという点で完全に違ったものではないということもいえるわけです。そういう連続の面とともに，また，非常に大きな変革の面も確かにあると思います。いま司会者から衣食住のことがでましたがって，衣の方からいいますと，20年代は確か，ショート・スカートが流行した時代ではなかったでしょうか。第一次大戦後の反動として。

原　それは，布が少いために，出来るだけ節約しなければいけないからだ，ということを当時聞いたことがあります。

上野　20年代に繁栄がスピード・アップされたその原因は何んですか。僕はやはり戦争と思いますね。戦争で一番得をするのは，中立国ですよ。アメリカは第一次大戦に参加したけれど，それも後の方になってからで，大部分の期間は大いにうるおった中立国だったでしょう――欧州に金を貸して，それを欧州に払えという。欧州の方はアメリカをけちだという。アメリカが戦争で繁栄したために人手が足らなくなって，黒人がどんどん増えてきたというのもこの頃でしょう。だから経済の中心が，ロンドンからニュー・ヨークに移ったとかいうのはすべて戦争に続くんじゃないかな。

松井　たしかに戦争というものが，国際的にも国内的にも，アメリカに非常に大きな影響を与えた。農業が非常に発達したのは，ヨーロッパに食糧を供給したからです。アメリカが戦争に参加したのは，ご承知のように1917年で，それまでは中立であったのですけれども，プロ連合国的な政策をとっていたのですね。農業以外にもアメリカは，参戦後からヨーロッパの連合国に対して軍需品も供給していたわけです。

田口　それで，戦争を契機に変わった点をあげますと，衣の面ではこの時代からアメリカ人は薄着になったようです。それまでは，非常に厚い下着を着込み，重いオーバを用いておりましたのが，この頃から軽装になり，材料もレイヨンなどが普及するようになりました。一つには，住宅の暖房設備との関係もありましょう。それから，食の面では，非常に栄養ということに関心が深まり，それまでのカロリー中心の食生活から栄養中心にきりかわり，食事内容も分化し，穀類をへらし，乳製品や新鮮な果物，野菜の摂取がめだって

増えた。この時代になると殆んどの家に，セントラル・ヒーティングができ，衛生面では水洗便所が完備し，電気冷蔵庫・真空掃除機・電気洗濯機その他の電気機具の普及，電話の発達がみられ，生活様式が変ってきます。またこれまでかなり大家族的であったのが，戦争の影響と戦争で子供が独立して世帯をもち，小さな家族に分かれて住む傾向が強くなり，人口の都市集中化とあいまって，大体一世帯四人半くらいになってまいります。しかしなんといっても，生活様式の変革の一番大きい点は自動車の普及でしょう。もともと広大な地域にまたがるアメリカの農村における交通機関として，市場に農作物を運び，あるいは生活必需品を買いに出かけるための必要やむをえざるものとして発達したといわれております。しかし自動車が発達するとともに，逆に，スーパー・マーケットに自動車で出かけて行って一週間分の買物をして，冷蔵庫に貯蔵しておくといった風に，自動車を中心とした生活がこの時代からはじまるようです。だから，ある意味で「消費革命の時代」――ちょうど，いま日本が経験している消費生活の変革が行なわれた時代といえるでしょう。

松井　20年代，僕らのおった頃は，まだスーパー・マーケットはなかったですね。A & P はありましたが，まだ小規模なものでした。

ケーリ　だから，一週間分仕入れてくるというのは，本当にそうなるのは，30年代の中頃か終り頃じゃないんですか。また，20年代のカーといっても，オープンカーで，まだ，ヒーターなどはなかったんですよ。

榊原　幌が出来るのは20年代の終りじゃないかと思うんです。それがいいかどうかというので新聞は大騒ぎをした。

松井　フォードなんかみなあれだった。

原　あの前輪と後輪の間のステップ，あれがみな，自動車についていた。ところが，あれがついていると田舎道を走っていると，時にホールド・アップに合う危険が非常に多いんだそうですね。

上野　1920年代には農業の方は栄えていたのですか。

松井　戦後，ヨーロッパの農業が復興するにつれて，アメリカの農業はオーバー・プロダクションになって，農業が栄えておるということは20年代を通じてできなかったと思うんですが。

田口　それに第一次大戦中は，ヨーロッパの食糧不足を補うため，できるだけ耕地をふやして，食糧増産を計ったのが，戦後のヨーロッパの復興とともに農産物の生産過剰になり農業は深刻な不況に陥って，農民は次々に離村していったんじゃないですか。

小松　戦前，農民は土地，建物へ多額の投資をしておったわけですが，これには，投機的要素があったため，その反動として戦後の不況で税と負債に苦しみ，小作人に転落したものが相当あったわけですね。パリティ・レーションが示めしているように，20年代はいわゆるシェーレ現象がずっと続き，農業所得の戦後から21年にかけての下落率は非農業者の3倍以上に達するという深刻なものがあり，農業と非農業との所得格差が著しくなってまいります。こうした事情を反映して，農民運動が活発に展開する。例えば，輸入関税の引き上げ運動，共同経営を中心とする農民保護，あるいは周知の農産物の価格支持政策の推進などです。こうした意味では，20年代は政策的にいって，アメリカの農業にとって一つの大きな転換期であったということもできると思います。

ケーリ　アメリカの工業生産が農業生産を追いこすのは，1870年頃ですが，アメリカが農業国でなくなるのはいつ頃ですか。

田口　第一次大戦後の農業恐慌とそれにともなう農業人口の減少から，トラクターの導入，その他農業の機械化・近代化が行われたといえるのではないでしょうか。

小松　そうですね。20年代は一般的に農業の不況の時期であったわけですが，その反面，高能率の農場に発展していった時期です。一人当りの従事者の生産は20年代にたしか20パーセント近く増大しています。こういう意味で，20年代は機械化の農業へのインパクトという非常に大きな意味をもっていたといえるでしょう。

松井　労働人口からいうと，1880年には就業労働者の大半，1900年には全体の約3分の1が農業に従事していたのが，1920年には4分の1程度から2割以下になり，現在では8パーセントということになっています。

上野　しかし，北部と南部とでは問題が違うのではないですか。

田口　もちろん南部では重要な地位を占めていますが，全体的にみれば，もう農業国ではないわけです。

大下　アメリカがいつ農業国から工業国に変ったかというさきほどのケーリさんが提出された問題ですが，生産額やその生産にたずさわる人口からだけではなく，social value とか文化や道徳の規準から，アメリカをとらえた場合どうなるかという問題だと理解したのですが。このことは urbanization とか社会・文化の standardization ということからみていきますと，20年代といろんな関係がでていると思いますが，またあとでうかがうとして，こうした問題に関連が深いのは交通じゃないですか。司会の榊原さんの専門なのですが。

松山　Lindbergh の大西洋横断飛行も20年代をかざる事件ですしね。民間航空というのはいつ頃からですか。

榊原　25年にはじめて郵便輸送が始まるんじゃないかと思います。それまでは，軍用機は勿論ありました。ご存知のように第一次大戦に使われました。またいろいろな実験飛行というのはありましたけれども，一つの会社が発足して，定期的に物を輸送するという形になりましたのは，25年以降ですね。

松井　民間航空はヨーロッパの方があの時分は発達していた。僕は27年にパリからロンドンまで飛んだのです。アメリカ国内ではまだあんまり発達していなかった。

榊原　ですから民間航空が本当に発達しますのは，そしてまた，民間航空が比較的政府の援助から独立してやりはじめるのは，1950年代ですね。それまでは，30年代になると相当規則的に飛ぶようになりますけれども大したことではない。大まかにいえば，20世紀の始めから，あるいは20世紀の20年代以後から，交通機関の動力が，今までの電気，蒸気というものから，ガソリンにかわってきた，ということは言えると思います。しかし，20年代に飛行機の発達をあとづけるのはちよっと無理じゃないかと思います。

松井　20年代は交通としては，まだ鉄道ですね。バスもそれから後ですし。

田口　20年代にプルマン・カーの発達がありますね。鉄道が一応飽和状態に達し，片方で自動車が発達して鉄道産業が斜陽化するにおよんで，それに対抗するためにプルマン・カーで快適な旅をということになったようです。

松山　しかしプルマン・カーはもっと古くからあったんじゃないですか 。

田口　ええできたのは古いですがこの時代になって，さかんになってきたと思います。

榊原　まあ，そういう交通の面で，鉄道はその頃までに完全に過剰に投資されていて，もうこれ以上線をひくところがない程までに敷かれてしまっていた。ですから凋落はもう少し前からで，じょじょに凋落していき，伸長率が落ちてしまうのが20年ぐらいじゃないですか。

ケーリ　20年代は飛行機が問題じゃない。自動車といっても，これもプライベートなもので，30年代になって本当に長距離でパブリックなものになり，だんだん鉄道がくわれてくる。

松井　自動車は失業救済事業にハイウエイを作ったことが発達させたね。

ISOLATIONISM とアメリカの経済

榊原　外交，政治の問題は，この分野の専門の研究員が近くアメリカから研究所に帰ってきますし，今日は時間もありませんので，あらためて機会をつくりたいと思います。今日は，経済の問題と関係も深い isolationism について話していただきましょう。大戦後の isolationism の原因としては戦争の反動が非常に大きかったという記憶があります。

ケーリ　さっきいわれた成年期に達したということで，「もうごめん」なんだね。世界はもうごめんだと，俺らでやっていけるんだ，なにも外は必要としないという気分があるんじゃないですか。

松井　ヨーロッパにかかわりあうと，プラスの面よりも，マイナスの面の方が大きいというわけで。

ケーリ　そうです。

松井　あの戦争中，莫大な金を貸したけれども返してくれないし，経済的にはマイナスの面が大きいから isolationism の方がいいという，利己主考的な考え方といいますかね，それが isolationism の一番大きい理由じゃないですか。Wilson が League of Nations を自から主張して作っておきながら，上院で否決されたというふうなうきめにあったわけですよ。だから，アメリカ人としては，経済的にはヨーロッパにかかわりあうことはマイナスなんだ，むしろはなれておった方がプラスなんじゃないかと，こういう考え方が根底じゃないですかね。

榊原　ある意味では，これは不幸なことだったんじゃないでしょうか。例えば，本当はアメリカ国民が十

分に自覚しない前には世界の指導的立場になる程の実力を身につけてしまっていたわけです。にもかかわらず，そういう体制からアメリカ人がひっ込んでしまった。アメリカが世界的な責任を果さなかった時代で，そこが帝国主義的な意味とちがいます。そういう意味では世界にとって，不幸なことだったという気もするんですけれど。

松井　国際連盟に入らなかったけれども，その後アメリカ経済は繁栄した。ご承知のようにアメリカ経済は，ほとんど生産の95%までは国内市場で消費され，あと5%パーセントだけを輸出貿易にまわすという事になっているわけですが，その5パーセントがアメリカ経済に大きな影響を与えるわけですね。ところで，ヨーロッパ，特に敗戦国ドイツは経済的に疲弊していたのですが，これを復興さすため，ドイツに対するアメリカの短期投資が戦後急激に増えてきたわけですね。ドイツは，ベルサイユの平和条約で660億円という天文学的数字の賠償金を連合国に支払う義務を負わされたが，その賠償金の支払いをアメリカからの借入れ金で支払っておったわけですね。ところが英国なり，フランスなりの戦勝国は，ドイツから受けとった賠償金を戦時中アメリカから借りた戦債の返済として支払っていたので，アメリカからドイツ，ドイツから英仏，英仏からさらにアメリカと国際的に資金がまわっていたわけです。それが世界恐慌に入ると，資金の循環が止ってしまったわけですね。そこでアメリカのドイツに対する融資が中止されると賠償金が支払えなくなり英仏もアメリカに戦債の支払いができなくなったので1932年 Lausanne の会議で戦債を棒引きにしてくれれれば，英仏もドイツから賠償金を取り立てないということになり，アメリカはこれを承認しなかったが，賠償金も戦債も事実上は棒引きになってしまったのです。だから結局アメリカは isolationism に傾き，ヨーロッパから手を引いたものの，また，経済的関係からヨーロッパに深入りせざるを得なくなってきたのじゃないですかね。

上野　つまり，そういう担い手にならざるを得ないように追いつめられたというわけですね。

松井　そうですね。

宗教 —LIBRALIM と FUNDAMENTALISM

榊原　それでは，文化の問題に話をうつしていただきましょう。まず宗教から。

上野　ケーリさんが最初にいわれた宗教の最もリベラルな時代，これは Reinhold Niebuhr が警告を発したところのものですか。

ケーリ　これは科学的なものの考え方を宗教にも導入していって，宗教の本質的なところを非常に希薄にしてしまったというか，忘れてしまうというような意味なのです。もう完全に scientism の方にかぶされてしまう。どういう考えでもよろしい，良いものは良いものであるという。宗教の本質的特徴であるキリスト教的伝統を全部けずってしまうような，丸い性格のないものにしてしまった。

榊原　今頃の年寄りのキリスト教の牧師さんなど，リベラルな人が残っているんじゃないですか。私もあまり宗教は知らないのですが，この時代は非常な繁栄期で，キリスト教は世界最高のセールスマンであるというような見方をしたりもしますね。

ケーリ　つまり最もうまくいったものは gentlemanship と通じています。とにかく宗教をセキュラーに導入してしまうということなのですね。

大下　宗教上の liberalism というのは，おっしゃるように広い意味では，キリストは地上最高のセールスマンというような非常にセキュラーで低俗なものも含めてみることもできますが，神学的には自由主義神学です。近代的な合理主義や進歩主義をうけいれ，またオプティミスティックな人間観に立っています。このオプティミズムは人間の力で地上に神の国を建設するのだという運動にもなり，一方繁栄の時代で革新的風潮がなくなると，この繁栄にあずかって成功した人間こそ神の恵みにあずかっているというセキュラーなものにもなる。上野先生がおっしゃったように Niebuhr が批判したのはこのような liberalism です。Niebuhr は20年代の終りまでデトロイトで牧師をしていて，Union Seminary に迎えられて，それから *Moral Man and Immoral Society* を書くのです。20年代の liberalism の代表は，先ほどの低俗なものもありますが，有名なニュー・ヨークの Riverside Church とその牧師 Fosdick でしょう。彼はキリスト教的敬虔をたもちつつ，宗教を近代的合理主義や科学的価値とも調和させていた。modernism の神学はもっと前からありますし，科学の立場から無神論をとなえる運動は20年代には失敗して，むしろ19世紀末の方が強かった。一般的にいって，以前の宗教的 modernism は非常にラディカルだったり，機械的だったり，何かごつごつした感じがする。ところが Fosdick

はマチュアです。それには彼の個人的要素もありますが，20年代には科学や合理主義が industrial society の社会的価値として都市の中産階級に定着してしまって，それが平和時の生活感情として，キリスト教の敬虔と調和できたのではないかと思います。また urbanization がすすんで，そこに新しい社会的価値が形成されると，旧来の伝統的な教派の枠がどうしても弱くなり，20年代のリベラルの側での教派の連合・提携の傾向がでてくるわけです。ですから，Riverside Church は denomination をこえて，都市の中産階級の一大カセドラルとなったのだと思います。Fosdick について，つけくわえますと，彼はその後，世界の危機に対してはリベラルというか，modernism では対応できないというようになるのですが。

松井　Darwin の進化論が問題になったのは，いつ頃ですか。僕がおる頃に，さかんに話があった。

岩山　20年頃からです。進化論を学校で教えることに強い反対がでてきて，やがてこれを禁じる州がでてくる。テネシー州の先生である Scopes の有名な裁判は25年でした。

大下　そうですね。進化論反対は中西部を中心に南部その他で広くなされます。地域的といってもよいし，都市の liberalism と農業地方的な fundamentalism との対立ともいえるでしょう。しかし Scopes の裁判にみられるような非寛容は，単に宗教上の問題というよりは，保守的非寛容になっていく地方の政治的社会的問題としてみるべきだと思います。これは urbanization や industrialization に対する，地方の反抗で地方の伝統的アングロサクソンのプロステタント的価値をまもろうとするものといわれています。ですから Ku Klux Klan にみられるような nativism とも関連があります。宗教的にみれば liberalism にしろ，fundamentalism にしろ新しい科学や社会価値に対して，キリスト教がどう対応するかという問題だった。勿論リベラルがその後有勢になるようにみえますが，厳密には，両方とも，その運動の中で，宗教的なものを失っていったわけで，次の時代に neo-ort-hodoxy というか，より深い次元の宗教が要請されなければならなかったのだと思います。

道徳的レッセ・フェール

榊原　宗教の話がでたついでに，20年代の道徳ということについて少し話していただきましょう。この時代にアメリカ人のモラルは非常にかわったということがいわれているのですが。

岩山　やはり20年代というのは戦前の道徳の基準からすればずっと低下したわけでしょう。

ケーリ　その通りですよ。

松山　問題はね，それを低下と見るか，変化と見るか，さらに向上とみるかということですよ。

岩山　ですからそれ以前の道徳意識から見れば低下したということですね。

ケーリ　低下というより，解放なんですね。ルールを全然ちがうところへもッていった。

松山　基準が変ったんですね。

ケーリ　道徳的レッセ・フェールかな。

榊原　価値観の変化がある訳ですね。さっきも宗教のところで新しい社会価値ということがありましたが，教会に属する人の数などはどうなのです。

大下　くわしくは知りませんが，教会に属している人の数はむしろ増加しているのですね。しかしおもしろいのは，教会員の数は増えたが，教会に出席する人の数は少なくなったと言ってなげいているのですよ。教会のかわりに日曜の朝ゴルフに行ったりする男が増えてきた。

モラルというと，やはり性の解放が中心でしょう。これはまた文学のところで話していただくとして，これは男女関係ということだけではなく，女性の解放とも大いに関連がある。婦人の知事や国会議員ができたり，女性が職場に進出する。昨今日本でいう BG がでてくる。よく似ているので戦後の日本の話をしているような錯覚をおこします。女性の知事も，死んだり失敗したり夫の身代り候補として出たということも。

松井　20年代に，いわゆるティーン・エージャの問題がやかましかったですね。

ケーリ　以前もそうだが，今でもですよ。でもこの頃がこうしたことが社会的に大きく問題になったはじめでしょう。

大下　ファミリーというものがかわってきたわけですね。

岩山　1919年に *True Story* という雑誌が出たらしい。23年になって読者数が約30万。ところが24年になると84万を越えた。25年になると150万をオーバーしている。それから離婚の面からいうと，1910年頃には100人の結婚した組の中で8パーセントぐらいが離婚した。20年には13パーセントか14パーセントになる。28年になると，大恐慌の前ですが，16パーセントから17パーセントに増えたということです。それから

言語の面でいうと，非常にきたないといわれる俗語がひんぱんに20年代から生まれてきた。

榊原　禁酒法もこの時代の代表的なものですけれども。

大下　禁酒運動は，いたって道徳的運動としてでてきたが，実際は，逆に社会の道徳を低下させたんじゃないですか。

文学者の EXILE

榊原　どうですか，文学についてですが，文学者の活動の中心がヨーロッパに移るということは，さきほど木村先生がおっしゃったアメリカにおけるところの文学者の自信というふうなことと，どう関係してくるのでしょうか。

松山　自信ということと関係あるといえばありますけれど，より直接的には，アメリカの文化的な風土というものに，物を作りだしていこうとする創作の芽がないということで，それを外に求めていくことじゃないでしょうか。第一次世界大戦のあとに出てきた，いわゆる Lost Generation の人びとがそうですね。アメリカを去ってヨーロッパに行き，パリを中心に滞在しか人びとが多かったわけです。ヨーロッパに出かけていった人は，20年代ばかりでなく，それ以前にも，例えば Henry James, Ezra Pound, Gertrude Stein などがあったのですが，特に第一次大戦後，20年代にアメリカの若い文化人や文学者がそういったヨーロッパ行きを集団でおこなったわけです。この前，この研究所の主催で研究会をやりました時，私が「失なわれた世代の作家達」と題して申しました様に，これは文学史の上では，Expatriation，あるいは Exile と呼ばれている現象です。典型的な例が Harold Stearns というジャーナリストの行為です。彼は20年代の初期の，その当時のアメリカの中堅文化人を総動員して，アメリカ文化論をそれぞれ書かせて，*Civilization in The United States* という本を出したわけです。ところが出てきた結論というのが，アメリカの文明は結局，うわっ調子なものばかりで根がない。何か根本的なものを生み出していこうとするものがない。従って，アメリカは文化の育ってゆく基礎がないから駄目であるというわけです。Harold Stearns はだいぶ派手なことをやったわけなんですが，出版社に原稿を渡したその日にヨーロッパに行って，11年間ヨーロッパに滞在して帰ってきたのです。そういう Stearns 的要素が，パリあるいはロンドン，あるいはその他のヨーロッパにいった人々の奥底にあった。その中で，いわゆる Lost Generation が一番目立つといいますか，あるいは，はなばなしい現象であったわけですね。

上野　パニック以前，第一次大戦後のアメリカは二つに分けられるのではありませんか。産業・経済面は楽天的だったしでしょう。ところがインテリの中には，非常に悲観的なものがある。今松山君のいったのはその悲観的な方ですね。つまり disillusion ですね。

榊原　つまり，インテリというのは，いつの時代でも批判的で幻滅とか，そういったことが好きですからこうした傾向が出てきたのでしょうか。

松山　そういえばそうかも知れません。だけど Expatriation とか Exile の原動力となったのは，第一次大戦後，丁度ハイティーン位の年頃で，そして根本的に幻滅感を抱いて帰ってきたような若い人々です。さきほどのアメリカ文学の流れの中で，それを置いてみますと，この若い人々は，ヨーロッパへ行って，ヨーロッパの若い世代の連中とお互いに交流しあって，そこで僕達でもやれるんだという意識と自信を持って，アメリカへ帰ってきた。アメリカ文学が新しい形の従来にない伝統を学び，10年代から既に起っている，いわゆる modernism というようなものを学びとってアメリカの国土に根を下すということになるのです。それの一つの頂点が1925年だと私は思っているのですが，これはお芝居，あるいは詩の方ですと，どういう事になるか知りませんけれど，1925年というのは，年表をこしらえてみると非常に面白いのでして，古い人々と，新しくでてきた小説家などが交流する年で，新しい世代と古い世代が丁度交錯して，古い世代の方は，もう下り坂になっていき，新しい世代は上り坂になっているというところです。

岩山　パリへ若い人々が行ったという原因は，もう一つあると思うのです。10年を境にして，coming of age になったといいながら，この coming of age は昔の genteel tradition の中での coming of age なので，それに対して反対していた人達は，そこで受け入れられないから向こうへ行って新しい自分達のものを見つけだそうとした。これがもっと大きいと思うんですが。

松山　やっぱり自分達が育ってきた風土を，そこで否定する形ですね。その否定するには，その土地においては都合が悪い。

岩山　確かにその土地にいたのでは，それ以前にあったものを否定して新しいものを打ちだすのは，よほど準備期間がないことには成功するのはむづかしい。でなければ，それ以前の文化とか文学の中心から離れたところでまず活動を始めることになる。詩の場合であれば，現代詩の中心になった人達，Gertrude Stein にしても．T.S. Eliot にしても，本当の自己を見出したのはヨーロッパにおいてでした。これらの人たちとともに Imagism の運動の中心になった Amy Lowell も，やはりヨーロッパで自分の進む道を見出している。そして，徐々に自分たちの新しい詩の基盤を築いていったわけです。もう一つの傾向に，当時では，アメリカの文学の中心地は，ボストンとかニュー・ヨークとかの東部であったわけですが，そういう限られた地域だけでなく，今迄顕著な文学活動などというものがなかったようなところで新しい活動が始められたことです。その一例としての，中西部のシカゴが新しい文学の一つの中心になってきたことがあげられると思います。もう20年代の中頃になると新しさをやや失いかけたとはいえ，*Poetry* といういわゆる小雑誌（これは今日までも続いている）が Harriet Monroe という婦人によって 1919年に創刊されたのがシカゴでしたし，Margaret Anderson というこれも婦人によって創設された *The Little Review* という雑誌が1914年から出版されだしたのもシカゴでした。そして，ヨーロッパへ行っていた若い詩人たちがこのような雑誌に大いに寄稿した。勿論，フランスやイギリスの前衛的な詩人たちもそれに寄稿しています。このように文学がインターナショナルになることによって，すなわち，ボストンとかニュー・ヨークの中心の活動から，もっと広い場に立つことによって，アメリカの詩というものは大きな成長を1910年代，20年代にとげたのだと思います。

文学の移り変り

榊原　大恐慌をはさんでの文学の移り変わりということはどうですか。

岩山　文学では割りに簡単ですね，非常にマルクス主義の作品が頭をのしてくる。

松山　そうですね，大体文学の方は20年代にでてきた若い連中が30年代に入って左翼の抬頭にあったり，あるいは社会と文学というものがもっと密接につながらなければいけないという意識がでてきたりして，いわゆる社会的な文学というものが，特に小説の方では出だしたんですね，Erskin Caldwell, John Steinbck Thomas Wolfe, J.T. Farrell それから William b-Saroyan もこの頃ですね。一言でいえば簡単なんですが，簡単なだけに，30年代の文学，特に小説というのはあまり面白くないんです。一つは方法の上で一時とだえていた自然主義的な方向にもどってきました，つまり，非常に克明に社会を描くというふうなことが，またはやってきたんですね。克明なんだけれども，20年代にヨーロッパ的な modernism の洗礼を受けたのがいつの間にか死んでしまっているのです。それは Hemingway なんかにはっきりでてきている。30年代の Hemingway は実にくだらんものを書いている。20年代の文学修業が非常に優秀な形で残っていったのが，いわゆる南部文学です。Faulkner を中心に Katherine Anne Porter などがでてくるわけですね。文学の芸術的な面が南部作家の方にかたまってきたんです。

岩山　詩の方にしましても，一応詩の形として南部が注目に価するというのは，25—26年頃迄で，それから彼らの agrarian の運動というのは，詩から離れていったわけですね。

松山　それは，いわば純粋芸術というものになってしまって，南部との結びつきがなくなったということですか。

岩山　ただ結びつきはでてくる。はっきりと文学との結びつきじゃなくて，南部との性格と結びついてくる。これは不思議な具合に20年代では非常に進歩的な考えをもっていた Fugitive Group なんかは20年代の後半から，30年になってくると，思想が非常に保守的になるんですね。そこで，fundamentalism なども擁護するようになり，進化論でも教えない方に賛成していくわけです。

松山　そうなると左翼的な方の先端を担うのは，小説家になってくる。

岩山　まあ詩でも，例えば，MacLeish なんてのは，完全に政治的に転向しますね，その当時まだイギリスにいましたけれど，Auden なんかはアメリカの詩としても重要でしょうし，Spender もでてくるし…。10年代，20年代にでてきた新しい詩という意味では，30年代の詩というのは，ないようなもんですね。

松山　30年代に文学批評は盛んに行われましたね。

大下　その批評は社会的なものですか。

岩山　社会的な批評もありましたが，この時代でも

っと重要なことは，Parrington 流の批評ではなくてほんとうに批評を社会と離して文学だけの方へもって行ったということです。

松山　非常に文学のからの中にとじこもった，いわゆるニュー・クリティシズムといった純粋批評が出たわけですね。つまり，一方で社会的・政治的な意識が濃くなってくる。それに対する反動みたいな形を取るのです。政治の中に入っていったものは小説家と一部の詩人と一部の社会的批評家だということです。

芸術界の新傾向

榊原　トピックが次々に変っていきますが，美術界の方は，いわゆる専門家がここには，おられないわけですが，アブストラクトへの定着というのは，いつ頃，始まるのでしょうか。

松山　やはりアメリカでの定着は少しおくれるかもしれませんが，10年代のはじめから，アブストラクトのかなりすぐれた絵が出てますね，Max Weber など…。

上野　Picasso, Matisse も10年代に入ってきているね。

岩山　1905年からの Matisse, Braque などの野獣主義が1910年頃から Cubism 派の絵画に発展し，Picasso や Braque が現代の抽象絵画を推進させ，10年代中頃から一応基盤がはっきりしてきた。

松山　アメリカでは，パリへ若い連中が行って学んで持って帰って来たのですね。それから，それ以前に，Post-Impressionism があって，これも戦前だけれども，やっぱり若い連中が向うへ行って学んできたものですね。芸術界の純アメリカ的なものが出て来たのは，やっぱり音楽のジャズあたりなんじゃないかと思うのだけれどもね。彫刻にしても，アメリカ的なものというのは，まだでてこないのではないでしょうか。

岩山　彫刻の場合は絵画と同じようなことがいえる。今世紀の初頭に受けた modernism の影響が10年代後半から20年代になって一層はっきりしてくる。ヨーロッパでみられるほど抽象彫刻はアメリカでは大きな勢力とはならなかったけれども，それでも，form の単純化とか detail な面の抑制という傾向は強くなってきたわけで，10年代には，建築家として有名な Frank Lloyd Wright や絵画の方で有名なシカゴの Lorado Taft，それから Max Weber が活躍しはじめる。20年前後になると表現派や抽象派の彫刻家たちは Cubism, Fauves, Dadaism の洗礼をうける。そして，20年代の後半には，今度は，Immaculates の勢力が強くなって，John Storrs, Theodore G. Haupt や Joseph Lomoff が出てくる。

大下　Wright が実際に活躍するのは，いつ頃でしょうね，この頃ですか。

ケーリ　この頃でしょう。第一次大戦前からではありますけれど，本当に花々しくなるのは，20年代ではないですか。例の東京の帝国ホテルも丁度，21，22年でしょう。

上野　それと同じのがシカゴ大学のキャンパスにもある。Robie House という名だが。

ケーリ　そうそう。

松山　これは，一寸，20年代の批判になるかどうかしりませんが，建築家の Minoru Yamasaki という人がおりますね。日本人の二世で，非常に有名な建築家でシアトルの大博覧会の会場を設計しましたね，あの人がいうのに，いかにも威厳があって，人の目をそばだてる様な建物は必ずしもアメリカのデモクラティックなスピリットを代表するものではない。つまり，そんな建物はその建物の中に入ったり，あるいはその建物を見る人に，かえって見る者の小ささというものを意識させる。デモクラシーの建築というものは，そいうものではいけないのだ，といっていますが，これは非常に面白い考えですが。

榊原　僕は大賛成だ。

松山　こういう批判が20年代の一般的な建築界の動きと，どういうぐあいに関係があるか……。

ケーリ　まあしかし，こういう時代は，embryo の時代で，ただもう新しいものへの投げ出しという意味で Wright のような建築はものすごい experimentalism でバーッとちがう事をしてみるという様な処に特色があるのではないでしょうか。同じ art の方でも アブストラクト の方は別としてとに角，今までとは全然ちがうものをさがしてみようとする動きが強かったんではないでしょうか。文学の方でも，一辺今までのものから逃げ出してみて，何かを求めてみようということがいえるのではないでしょうか。

榊原　ジャズの方はこれはまあ，わたくしは判りませんが。

岩山　ジャズ以外にね，絵と非常に関係のあるのは音楽ですね。特にロシア・バレー。Stravinsky がでてきたのはパリで1910年ですね。10年には *L'oiseau*

du feu, 11年には *Petrouchka* が上演されている。「春の祭典」が13年頃でしょう。がジャズの方は，それと全然ちがったものからでてくるのでしょう。だから平行している。

榊原　クラシックの方はヨーロッパの流れがずっとあることですけれど，ジャズの方はある意味では，本当にアメリカで生れた音楽という風にいえるのではないですか。ジャズにも色々なジャズがありまして，仲々まとまらないと思うんですけれど，ジャズのクラシックというのは，やっぱりこの時代に生れたんではないですか。いわゆるジャズのクラシックといったところでケーリ先生どうでしょうか。

ケーリ　ジャズは，全国にパット広がるんですね。ですからポピュラー・ミュージックは勿論前からあるわけなんですが，ジャズは特殊な黒人の一部の者だけじゃなしに，一つの音楽体系として全国に広がっていく。そういう様な意味で，アメリカ独得のものといえるでしょうね。しかし，20年代としてあるものは，Whiteman とか Gershwin とかいったもので，ジャズとしてはなまぬるいぐらい大きいオーケストラいっぱいでやるようなスウィート・ジャズなんでしょうね。全国的なものになっていったのは，これは一つの音楽としてはずかしくないもの，ちょっとおかしいけど，そういう類型をはっきりもってしまう。恐らくこれは，ドラマといくらか関係があるのではないでしょうかね。というのは，いわゆる，第一次大戦後，20年代で始めて，Broadway というものがでてきて，いわゆる，Broadway Musical というものは，やはりヨーロッパ人になかったようなものじゃないんですか。それはもっと洗練されていって，今でも私らが憶えている「オクラホマ」とか，そういうものはかえって今度はヨーロッパへもっていって喜ばれるんですね。

松山　ミュージカルまできますとすぐ映画に結びつきますね。映画は産業面との結びつきが濃いですね。この前，チャップリンの「黄金狂時代」を見ましたがこれもやはり20年代の映画ですね。

原　トーキーがでてきたのは20年代半ばすぎ，ちがいましたかね。

ケーリ　1926年が始めてでないでしょうか。

原　チャップリンのああいうなんというか，テンポの早い映画というのは，このごろでだんだんなくなってきたね。

ケーリ　この時代の英語の問題があるね。この時代にアメリカの俗語が定着したんだね。その前の時代では俗語は余り書き残されていないんじゃないかな。

上野　そりや残されていることは残されているけれどもね。きたないか，きれいか判らんけどね。

松山　だけど，アメリカ人が自分の国の言葉というものに意識しだしたのはこの頃の人達だと……。

上野　そりゃそうだ。

ケーリ　それはしかし，やっぱりアングロサクソンの中では，ことばの面で中心がやっぱりロンドンからニュー・ヨークの方に移ったということなんですね。Mencken もはっきりいっているのじゃないですか。アメリカ語の方が英語の方より勢力が強くなっていくんですね。もっと新しくでてくるその俗語が，アメリカニズムかイングリッシュニズムの方に入っていくのが丁度第一次大戦を境いにするらしいですね。アメリカの方の英語が，バイタリティーを，とうとう英語から取ってしまうのが第一次大戦なんらしいです。

松山　1930年に Sinclair Lewisがノーベル文学賞をもらったときのことなのですが，Lewis は何千万の大勢の人が使っているアメリカの英語で文学を書いている，だから彼に文学賞を与える理由の一端があるんだと，スウエーデンのアカデミーがいっているらしいですね。

20年代の評価

時代の象徴 COOLIDGE

榊原　経済，社会，文化という面ではいろいろ話が出ましたが，さっきも申しあげましたように今日は残念ながら政治，外交については，ほとんどつっこむ余裕はもちません。それで今ちょうど言葉の話がでましたので，言葉をいわない大統領であった Coolidge についてちょっと話していただいて，それから30年代に向っての展望という観点からもう一度20年代を大きくふりかえってみたいと思います。Coolidge はこの時代をいろんな意味で非常によくシンボライズする大統領でなかっかかと思うんです。Harding はご承知のように，せっかく大統領の当選をラジオで始めて放送してもらいながら，まもなくあんな変なことになって死んでしまうし，Hoover は，29年に大統領になってみたが繁栄の時代はわずかで，さっぱりで，悪戦苦闘していってしまう。やはりこの時代を代表する大統領といえば，Coolidge じゃないかと思います。Coolidge は Amherst College が生んだ唯一の大統領でもあり

ますし，ケーリさんから Coolidge 擁護でも。

ケーリ　Coolidge は Last Puritan とよくいわれますが，歴史家に批評さすと，私もその一人になるかもしれませんが，Harding についで点数の低い大統領にされるわけなんです。私は，よくわかりませんが，その主な原因は，政府はできるだけ手を入れるべきじゃないというはっきりした考えなんですね。経済にしろ，文化にしろ，何にしろ，これを非常に純粋に守っていった人なんですね。彼の性格もそうなんで，無口の人で，ほとんど何もしゃべらない。有名な話なんですけど，どこかにメッセージを頼まれた時に，電報一本よこして，そこにはただ「ハロー」とだけあったという。まあ，こんなような人で，できるだけさわらないといった態度でした。

松井　Coolidge がマサチュセッツの知事をしておったとき，1919年にボストンに警察官のストライキが起ったんです。その時に Coolidge ですね，警察官というのは社会の治安を維持する重要な任務をもっている。それがストをするとはもっての他だ。警官のストはいかなるところでも，いかなる事情においても許されるべきではないという声明を出したわけですね。それでこの声明が全国的に報道されて彼の名声が高まり，大統領に選ばれるようになったんだとある人は書いております。20年代が幸いに平和で経済も繁栄していたので，このような比較的平凡な人でも大統領になれたということをいっている人もあるんですがね。

ケーリ　彼は警官の問題のように，いざとなればはっきりした自分の意見をもっているんですけれども，できるだけ手をつけないのが主義であったのですね。非常にピューリタン的な，つまり神にまかしていたのかどうか知りませんが，運命感がはっきりしているんですね。だから，歴史は導びかれるところに行くのであるというふうな考えですね。

時代の底流

榊原　おっしゃるように何事にも手をつけないという信念は Coolidge という人物をあらわしていますがそれはまた20年代が何を望んだかを示していることもいえるでしょう。それで，このような20年代を，今までのお話をもとにして，もう一度30年代への展望ということも含めて眺めてみたいと思います。さきほど文学については，30年代への見とおしということも発言していただいたわけですが，その時にも，はなやかな20年代の社会の表面とは逆の方向に流れているもろさというようなことがあったのですが。

松山　そうですね，大恐慌でアメリカ社会は物質的にがくんときたわけです。そのときに精神的なものが急にぽきっと折れたというのでなく，そういったもろさが，社会の底流というか一般大衆の精神的ムードとして20年代にあったのだということですね。それが文学作品なんかに非常にはっきりした形でてきている。

T.S. Eliot の *The Waste Land* もやはりそういう一種の不毛を現わしたものでしょうし，非常に派手な20年代の表面を描いた，Fitzgerald の作品でもやはりその背後には精神的もろさというか，感情的にぽきんといく崩壊というものがひそんでいるのを描いていると思うのです。こうしたことは，歴史的にというか社会的にみてどうなんでしょうか。

大下　賛成なんですが，歴史的にみて何が時代の底流かとなるとずい分むつかしくてね。答になるかどうかわかりませんが，まだ話がでなかった progressivism の問題も一つのいとぐちになるんじゃないかと思うのです。19世紀後半からあるわけですが，特に20世紀のはじめから大戦まではアメリカは progressivism の強い時代です。この progressivism の革新的な本質をどう理解するかということは別にして，この流れは内政にも，外交にも，思想にも広くアメリカ社会にゆきわたっていた。ところが20年代というか，大戦後には，急にその流れがなくなるように見える。全くなくなるわけではないですが，かって progressive で代表的な La Follette を独立の大統領候補にした24年の選挙のように，それは過去のためのそうとう盛大な葬式といった感じさえするわけです。

榊原　*Farewell to Reform* なんていう本がでたりしますね。24年の選挙といえば Coolidge が大勝利をおさめたときですね。28年は共和党の Hoover が勝って，民主党はニュー・ヨークの知事 Al Smith をたてて敗れている。

大下　そうです。Al Smith についてはあとでぜひ申しあげたいのですが，20年代には progressivism の流れが弱くなるだけでなく，批評家の Mencken のように progressive に対して強く非難するものがでてきます。さっきおっしゃったように社会を改革するのでなく，Coolidge のように何も手をつけないというのが20年代を代表するわけです。しかし，この progressivism の流れが20年代に一度枯れてしまうの

かどうかということが問題になっているわけです。それが30年代のニューディールとどうつながるかということにもなるんです。これは歴史の連続と非連続みたいに，観点の相違でいろんな評価がでてくるわけですけれど，かつてのprogressivismをおしすすめていたものが，25年のScopes裁判のときのBryanに代表されるように，保守的fudamentalismのささえになってしまうんですが，一方歴史家でいえばBeardやParringtonのように20年代以前と30年代を結びつけるprogressiveな線もあるわけです。

こうみてくると，20年代に何かがおって，あるいは20年代にはっきりあらわれてきて，それが従来の革新的なものを時代おくれというか無能力にして，また大恐慌からニューディールを待たなければ革新的なものが社会の表面にでてこないようにさせていたわけじゃないかということです。この何かが，たんに戦争への幻滅とか戦後経済の繁栄というだけではすませないものじゃないかと思うんですが。今までの価値観ではあてはまらないもの，そうかといって新しいものをそだてるほどに熟していないものです。松山さんのおっしゃるぽきっといく思想の弱さといったものは，戦後の社会の表面現象といったものにつまずいて，変化しつつある何ものかの本質をふまえることができずに，表面のところでおし流されたり，つまずいたりしてしまっているんじゃないですか。何かなんていわずに具体的言えればいいのですがまあ，urbanizationでもよいいし，ケーリ先生の言われるマス化でもいいわけですが，それが歴史的に広い意味であらわすものです。この座談会のはじめにやった20年代を大ずかみにした諸変化の総体みたいなものです。非常にいいかげんな表現で恐縮ですが，この何かを具体的につかまえるのが20年代の研究課題だと思います。

ケーリ　それをもう一つ逆算的にいいますと，それだけ大きなことがアメリカの社会にあったのだと，つまり，こういうマス化していくということが，それほど大きいものであったということです。これはやはり，ただ生活面でのマス化とか生産のマスプロだけでなしに，全文化，社会のすべての層に産業・経済のよさをばらまいていくための養成期なんですね。だから1929年にころんでしまう。あれぐらいのころび方より，もっと大きなころび方でもよかったのじゃないかといいたいくらいです。これだけ大きい，そして一億何人かの人にマス化していく武器といいますか，アイディアを与えたわけですから。

大下　話をまたもとにもどすようですけど，さっきCoolidgeが20年代をシンボライズしているということだったですが，これに反対ではないのですが，榊原さんがちょっといわれた28年の民主党候補のAl Smithですが，彼もよく20年代を代表していると思いますね。ニュー・ヨークのEastsideの移民の子で，カトリックで，ニュー・ヨークの知事として相当のことを20年代にやろうとした人，禁酒法にも反対だった。彼を大統領におくろうとした票には，移民を中心に都市の票が多かったわけです。彼はニューディールを喜んで受けいれることはできなかったし，それほど革新的でもなかったのですが，彼を支持した，彼がシンボライズするものは，彼がまだ大統領になれなかったという意味からも，さきほど申しあげました20年代の何ものかにつながると思います。

小松　社会・文化といった見通しは大分はっきりしてきましたが，思想の方面ということにもう少し話をすすめていただけますか。

ケーリ　まあ20年代にふろしきを広げすぎたというか，本心はどこにあったかということを，29年の恐慌をへて30年代に入ってから反省するような傾向なんですね。一人の大きい代表はNiebuhrで彼は宗教界のみならず文化に相当影響する。経済の考え方にまでも。つまり，ずっと横に広がったのを今度は深く掘り下げてみて，以前は大分まちがったのじゃないかと，問題の見方をずっと掘り下げてみないと本質までいかないということで，人間観や歴史観とかが，30年代になって本当の意味で，初めて問題にされてくるんじゃないですかね。

小松　20年代がマス・カルチャー時代であって，30年代がさらに深められていったということなんですね。

ケーリ　そうです。

大下　Niebuhrはたしかにいい例ですね。というのは彼が30年代に急に有名になったというのでなく，20年代にデトロイトという20年代を代表する新しいアメリカの一つの中心で，足を地につけて現実社会の問題にとりくんで考えていたということが意義があると思います。文学のところで，インテリはいつも批判的であるということがありましたが，アメリカでも批判的でなかったらインテリでないでしょう。しかしその批判がどういうように社会の中にかかわっているかですね。以前インテリの多くはprogressiveだったわけですが，彼らはやはり社会の批判勢力だったわけで

す。しかし，20年代を代表する Mencken などは，過去の progressive は知的でない，狂信的だといって批判する。民主主義ではだめだと批判する。そうかといっていままでの民主主義を完全に否定もできない。その批判は鋭くてずいぶんあたっているけれど，彼自身は社会から離れている。20年代のインテリにはそういうところがあるので，20年代の現実と本当にはとりくみえないという傾向があったのじゃないか。これはさっきの20年代のもろさということにも関係すると思いますがね。Walter Lippmann なども面白いと思います。どう評価できるかわたくしはよくしりませんが。まだ少し古い方の progressive の流れをくむ Beard や Dewey の方が，20年代にはつよいものをもっていて，批判しながらも，機械化だとか社会の動きとかをうけとめているのですね。

アメリカの国民性と20年代

小松　私がこの座談会を聞かしていただいて感じることを言わせてもらいましょう。私なりにアメリカ的なるものを考えてみると，アメリカの国民性というのは，一元的なものよりも多元的なものじゃないかということですね。ですから古い歴史的な伝統というものが，十分具体的な統一的なものになっていない。したがって，新しい時代に対応する対応力というものですか，或いはバイタリティといいますか，そういうものが非常に盛んな力をもっている。一つのはっきりしたパターンや統一的なものでなく，多元的なものがその中にかくされておったのではないかということです。これがいろんな面に発展する可能性をもっている。英国のように固まってしまったら，外国のいいものを取り入れようとする寛容性もないし，それから受容もしない。アメリカはまだ若々しいものをもっていて，まだ自分の本当のいいものを模索している。模索といったら言過ぎかもしれないけど，ヨーロッパに行ってもって帰ったものを，またアメリカで一つの新風として受けいれる。流動性というのか，受容性というのか，そういうバイタリティが非常に強いのじゃないですか。だから，年令から言うとまだ青年から壮年となっているかどうかというところです。こういうことを考えながらお話をお聞きしておったんですが。

松井　アメリカが何といいますか，非常に豊富な天然資源をもっていたので，植民地時代からそれを開拓していこうというような，そういう自然的条件といったようなものがプラグマティズムを生んできたのでしょう。とにかく，trial and error でやって失敗すればやめようというふうな一つの国民性と申しますか，そういうものが出てきたんじゃないかと私は思うのです。

榊原　そういうことを一番よく示しましたのがニューディールですね。いろんな思想の流れがあるにもかかわらず，共産主義の方に走らないで，今迄のままのアメリカの波を受けつぎながら，新しい解決策でしていくということですね。

田口　そのことと関連してですけれど，アメリカの歴史を逆に見る場合，たいてい大恐慌というのが非常に大きく浮び上ってくるわけですね。アメリカ人の考え方というのは二つの戦争よりもっと大恐慌を深刻なものとして話しする場合が多いんですね。つまり戦争はどっちも勝っているからということもあるでしょうが，恐慌によってうけた生活の破壊ということが非常に大きなウェイトを占めていると思います。だから，そのような意識とは逆に，不況前の時代というのは，繁栄の時代だけれどもそれは不況を生んだのだから非常に悪者であるというふうな見方が強い。そうした20年代は悪者という観念なしで，時代の中味を前とのつながりでみてみるということは，20年代の功罪というものを感じさすことが出来る。そして今小松先生が指摘されたプルーラリズムということからしても，20年代というのは或る意味では大きな変化であったと同時に10年代から連続したものであり，30年代にも，つながって行くというところに，一貫したものと，ちがうものとがはっきりしていくんじゃないかという気がするんです。

榊原　田口先生のおっしゃったことで一応の結論がでたようです。政治や外交のほかにも論じきれないものもまだ多く落されているわけです。しかし，今日は，アメリカ研究所の成果としてではなく，これから具体的に研究を進めていく出発点として，また各自の専門分野の研究でなく，お互にあゆみよるという体制をつくるものとして，いろいろ有意義だったと思います。